

# 建築史家・鈴木博之の 全仕事「近代と建築」を 5つのキーワードで読み解く

## 鈴木博之教授退職記念連続講義・最終講師は石山修武

「作家論を組み立てるように、『鈴木博之』を考えてみる」と、建築家・石山修武氏(早稲田大学教授)がパネルの前に立つ。

1月15日、東京大学建築学科15号教室で行われた「鈴木博之教授退職記念連続講義『近代建築論』」の最終回は、会場には100名ほどの受講者が詰めかけ、通路にも座り込むほどの盛況ぶり。同講義は、2008年5月から2009年1月までの全8回、2008年度で退官する建築史家・東京大学鈴木教授の仕事を主要テーマ別に講師が論じ、その後、教授とディスカッションする構成をとった。講師陣には、難波和彦、五十嵐太郎、横手義洋、松山巖、佐藤彰、初田享、藤森照信と、建築界の最前線を走る顔ぶれだ。

石山氏の受け持つお題は「近代とは何か」。冒頭で、「鈴木氏の『近代』を問い、認識を拡張させていった仕事」として、5つのキーワード、「保存」「様式」「地霊」「装飾」を提示。

「保存」については「研究者の枠を越え、(個々の保存問題の取り組みなど)『実行家』として活動された。建築保存に対する一般社会の認知を広げることに貢献し、この分野での仕事はほぼやり遂げられたのでは」と評価する。

また「様式」も「完成した仕事」だと述べる。「東京大学にとって鈴木さんを近代建築研究のためにイギリスへ派遣したことは幸運である。明治初期の日本に建築思潮と建築教育を導入したジョサイア・コンドルなどに注目し、イギリスと日本の建築様式の影響、推移から『近代の成立』を研究された。ちなみに鈴木さんはイギリスを偏愛されている。現代ではノーマン・フォスターやリチャード・ロジャースなど、イギリス発の産業革命につながるメカニクな様式の建築を好まれるようだ。新官邸建設の際の様式論議では、『和風ハイテクにせよ』と提唱され、建設大臣官房官庁営繕部の設計によって生かされ形になった」。

「まだ形となっていないのが『装飾』だと指摘。「後に連続講義を本にする際、鈴木さんから『ウィリアム・モリ

鈴木氏(右)が「2人は喧嘩したことがない」と言うと、石山氏(左)は「僕が徹底的に喧嘩をさせた。論戦になると膨大なエネルギーが必要だから」と応じた

スとコンピューター』という課題を与えられた。現代の『電子社会』を『装飾』で読み解くことと受け取っている。磯崎新の『Computer Aided City』(1972)、丹下健三の『フジテレビ本社ビル』(1996)にしろ、先進的に電子社会を表現しようとしているが、プリミティブすぎ、アナロジーに留まっている。一方で鈴木さんの文、『モバイルの普及によって、都市空間はすでにそこに居て、そこに居ない人の群れが出現し、風景が空洞化し始めている』は、現代の社会のありようをつかんでおり、課題を解く糸口としたいと考えている」

鈴木氏の人物像にも迫る。「夏目漱石の作品が持つ『明晰』と『非明晰』さがある。ビートルズの『イエスタディ』と中島みゆき、泉鏡花の著作がお好きなようだ」

「非明晰」な面が結実したのは「地霊(ゲニウス・ロキ)」の概念の提示。日本の都市空間の変貌を、「土地の地霊の喪失」と論じた鈴木氏の仕事を、石山氏は自身の奔放な構想力で読みかえる。「オリンピック会場に隣接する中国の広大な廟、ワイマールの森にあるパウハウスのモニュメントも『地霊』。20世紀の建築を象徴するミース設計の超高層『シーグラムビル』のグリッドは、ニューヨークのまちなみのグリッド(俯瞰地図を示し)と重ねられる。このビルも現代社会の『地霊』といえる」

最後はチャートで、鈴木さんのポジションを示す。「『建築論・批評・エッセイ』の仕事、『アカデミーの中での歴史記述』の仕事の間に、『実行家』の顔があり、それぞれのエッジに立つ。よく分からないが彼の一番魅力的な言葉は『詩的全体性』」

講演後のディスカッションで鈴木さんは、「石山さんは読みかえの達人。若い頃からの付き合いだが、彼と出会えたことは人生の僥倖」と言うと、石山氏は、「退職したら鈴木さんはより自由になる。野に虎を放つようなもの」と、今後の活動にエールを送った。

